

# 意欲的に取り組める体育授業の在り方に関する一考察

—— 大学生の中学校体育授業に対する意識に着目して ——

木 山 慶 子・國 安 花 菜 子

**A Study about Good Physical Education Classes:**  
Focused on University Students' Learned Situation in Junior High School

Keiko KIYAMA and Kanako KUNIYASU



# 意欲的に取り組める体育授業の在り方に関する一考察

—— 大学生の中学校体育授業に対する意識に着目して ——

木 山 慶 子<sup>1)</sup>・國 安 花菜子<sup>2)</sup>

1) 保健体育講座

2) 教育学研究科

(2019年9月25日受理)

## A Study about Good Physical Education Classes: Focused on University Students' Learned Situation in Junior High School

Keiko KIYAMA and Kanako KUNIYASU

Faculty of Education, Health and Physical Education, Gunma University

(Accepted on September 25th, 2019)

キーワード：意欲的，体育授業，中学校，大学生の意識調査

### I はじめに

保健体育科の目標には、「心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進すること」(中学校学習指導要領, 2017)が掲げられている。また、中教審(2005)は、体育は他の教科・科目ではできない身体運動を通しての「経験」ができる教科・科目である、としている。

大築(2009)は、人間として生きていくための基礎的能力の総称である「体力」について、「憲法25条に定められた『健康で文化的な最低限度の生活を営む権利』を行使する必要不可欠な活動資源であり、よく鍛えられ、健康で活力ある身体は、豊かな知識や流暢な外国語と同様に、それ自体が一つの身に付いた教養である。」と述べ、体力およびそれらを養う身体教育体育の重要性を指摘している。

しかしながら、体育は受験科目にないこと等により、受験科目に比べ軽視されているというイメージがあり、中教審(2002)は、保護者をはじめとした国民の意識の中で、人を知識の量で評価しがちであったことにより、子どもの外遊びやスポーツの重要性を子どもの学力の状況に比べ軽視する傾向が進んだ、と述べている。

一方、近年の研究では、子どもの体力と学力に関連性があることが報告されている。新本ら(2016)は、体力測定項目と学力測定項目間で多くの相関関係が認められたとしている。また、谷口ら(2010)は、体力に自信のある子どもたちは学習意欲が高く、子ども期における体力と学力には関連性が存在する可能性を示唆している。

このように、体育は心身の発育のみならず、学力向上においても有効な教科であると考えられる。また、文部科学省は、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の3つを「生きる力」として掲げており、これらの力を育むうえでも体育は重要な教

科であると言える。よって、学習者に「体育が重要である」という意識を持たせ、意欲的に取り組ませる必要がある。

そこで本研究では、大学生への質問紙調査を実施し、体育授業に対する認識の実態を把握する。それらの結果から、意欲的に取り組むことができる体育授業の在り方について考察することを目的とする。

## II 研究方法

### 1. 調査対象

群馬大学の1年生267名、及び群馬大学教育学部保健体育専攻の1～4年生56名、の計323名である。授業の際に質問紙を配布し、調査の主旨に同意を得られた者を対象とした。

### 2. 調査期日

2018年12月に質問紙調査を実施した。

### 3. 質問紙の内容

岡野・山本(2003)の先行研究をもとに作成した。これらの質問に、「体育授業に意欲的に取り組むために必要な条件は何であると思うか」「体育における「学力」とはどのような力であると思うか」「体育において必要な「学力」とは何か」を加えた全11問である。質問の内容は以下の通りである。

なお、中学校時は義務教育であり、体育に関する質問も中学校時のことを聞いているため、部活動経験については中学校時の所属部活動を回答してもらった。

【1】個人に関すること(学部、性別、部活動経験)

【2】体育に関すること

- ①体育はどのような教科か
- ②体育の目的はどのようなものであると思うか
- ③体育授業の進められ方・行われ方はどうであったか
- ④体育の先生は授業中どのように指導してくれたか
- ⑤体育の時間数についてどう思うか
- ⑥体育授業に意欲的に取り組むために必要な条件は何であると思うか
- ⑦体育における「学力」とはどのような力であると思うか
- ⑧体育において必要な「学力」は何か

### 4. 調査方法

質問紙は授業の担当教員に配布を依頼し、授業時に教員経由で学生へ配布した。回収ボックスを設け、対象者は記入後、随時回収ボックスへ提出する形式をとった。配布から提出までの期間を1週間とした。

なお、収集したデータについては、研究のみで利用することとし、個人情報保護の配慮を最大限に行った。

### 5. 分析方法

分析には、Excel及びSPSSを使用した。

また、教育学部保健体育専攻生は、教育学部の他専攻生と体育に対する意識に差があることが予想されたため、教育学部保健体育専攻生と教育学部他専攻生に分けて分析を行った。

### Ⅲ 結果と考察

群馬大学の教育学部、社会情報学部、理工学部、医学部の1年生267名、教育学部保健体育専攻の1～4年生56名、計323名から回答を得た。

#### 1. 個人に関すること

##### 1-1. 所属学部

教育学部（保健体育専攻を除く）は47名（14.6%）、社会情報学部は27名（8.4%）、理工学部は120名（37.2%）、医学部は73名（22.6%）、保健体育専攻は56名（17.3%）であった。

##### 1-2. 性別

男性は158人（48.9%）、女性は165人（51.1%）であった。

##### 1-3. 部活動経験

中学校において、運動部に所属していた者が246人（76.2%）、文化部に所属していた者が69人（21.4%）、部活動に所属していなかった者が8人（2.5%）であった。中学校において、運動部に所属していた者は全体の約4分の3を占めた。

#### 2. 体育に関すること

##### 2-1. 体育はどのような教科か

体育がどのような教科であるか（図1の8項目）について、「とてもそう思う」「わりとそう思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の4件法で回答を求めた。さらに、「とてもそう思う」「わりとそう思う」を「思う群」、「あまりそう思わない」「全然そう思わない」を「思わない群」として、検討した。それぞれの項目について「思う群」の人数の割合を図1に示す。

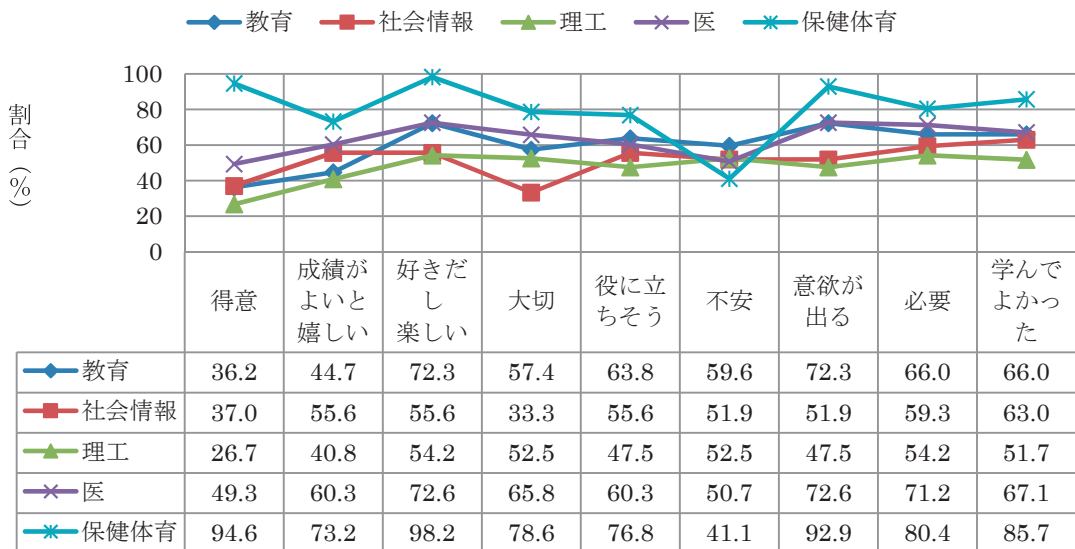


図1 体育はどのような教科か

その結果、以下のことが考察された。

- ・「1. 一番得意な教科」において、保健体育専攻は高い割合を示したが、他の4つの学部では半数に届かなかった。
- ・「3. 好きだし楽しい教科」において、保健体育専攻は高い割合を示したが、社会情報学部と理工学部では半数にとどまった。
- ・「4. 学校の勉強の中で大切な教科」では、保健体育専攻は8割に届かず、教育学部も6割にとどまった。また、社会情報学部では3割とかなり低い割合であった。
- ・「5. 将来役に立ちそうな教科」において、理工学部では5割に届かなかった。
- ・「7. がんばろうという意欲が出る教科」において、保健体育専攻は高い割合を示し、教育学部と医学部も7割を超える結果となった。一方、社会情報学部と理工学部では、半数にとどまった。

### 2—2. 体育の目的

体育の目的（図2の11項目）について、「とてもそう思う」「わりとそう思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の4件法で回答を求めた。さらに、「とてもそう思う」「わりとそう思う」を「思う群」、「あまりそう思わない」「全然そう思わない」を「思わない群」として、検討した。

それぞれの項目について、「思う群」の人数の割合を図2に示す。

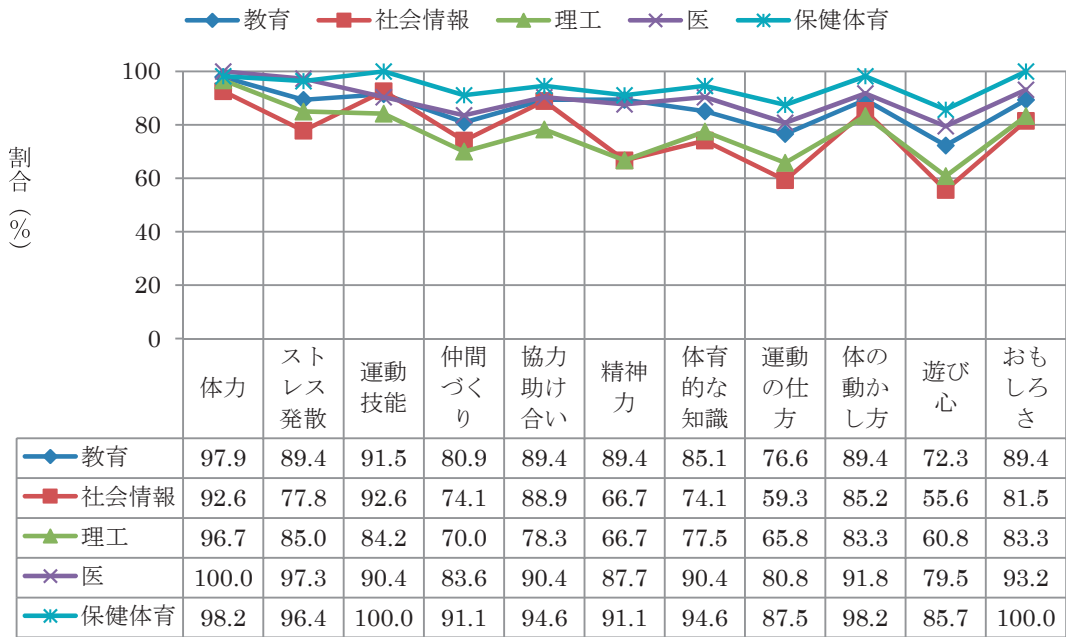


図2 体育の目的はどのようなものか

その結果、以下のことが考察された。

- ・「1. 健康なからだをつくり、体力をつける」においては、全ての学部で9割を超える結果となった。
- ・「3. 運動技能を身に付ける」「9. いろいろなからだの動かし方をできるようにする」「11. 体を動かすことのおもしろさを身に付ける」という3つの項目において、全ての学部で8割を超える結果であった。
- ・「6. がんばってやり通す精神力を鍛える」「8. 将来の生活で活かせるような運動の仕方を身に付ける」

「10. 遊び心を身に付ける」という3つの項目において、社会情報学部と理工学部が、他の学部 비해、低い割合を示した。

### 2-3. 体育授業の進められ方・行われ方

体育授業の進められ方・行われ方（図3の7項目）について、「とてもそう思う」「わりとそう思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の4件法で回答を求めた。さらに、「とてもそう思う」「わりとそう思う」を「思う群」、「あまりそう思わない」「全然そう思わない」を「思わない群」として、検討した。それぞれの項目について、「思う群」の人数の割合を図3に示す。

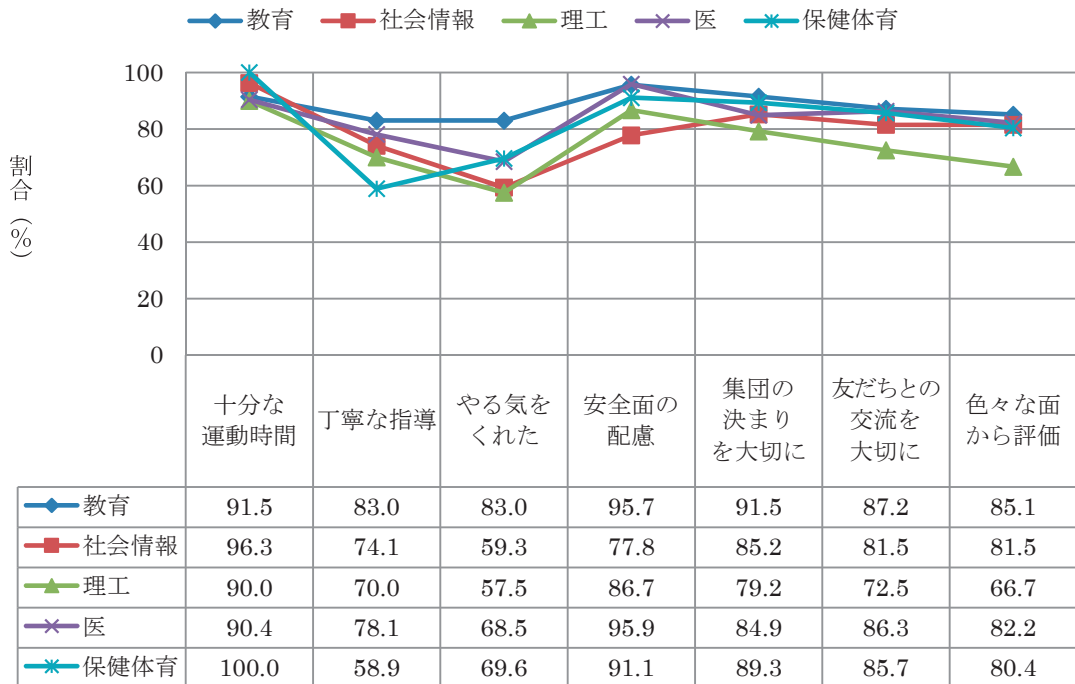


図3 体育授業の進められ方・行われ方

その結果、以下のことが考察された。

- ・「1. 十分に運動する時間をとってくれた」においては、全ての学部で9割を超える結果であった。
- ・「2. ていねいに教えてくれた」においては、8割を超えていたのが教育学部のみで、保健体育専攻は6割に満たなかった。
- ・「3. やる気を起こさせてくれた」においては、8割を超えていたのが教育学部のみであった。社会情報学部と理工学部では6割に届かなかった。

### 2-4. 授業中の教師の対応

授業中の教師の対応（図4の4項目）について、「とてもそう思う」「わりとそう思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の4件法で回答を求めた。さらに、「とてもそう思う」「わりとそう思う」を「思う群」、「あまりそう思わない」「全然そう思わない」を「思わない群」として、検討した。

それぞれの項目について、「思う群」の人数の割合を図4に示す。

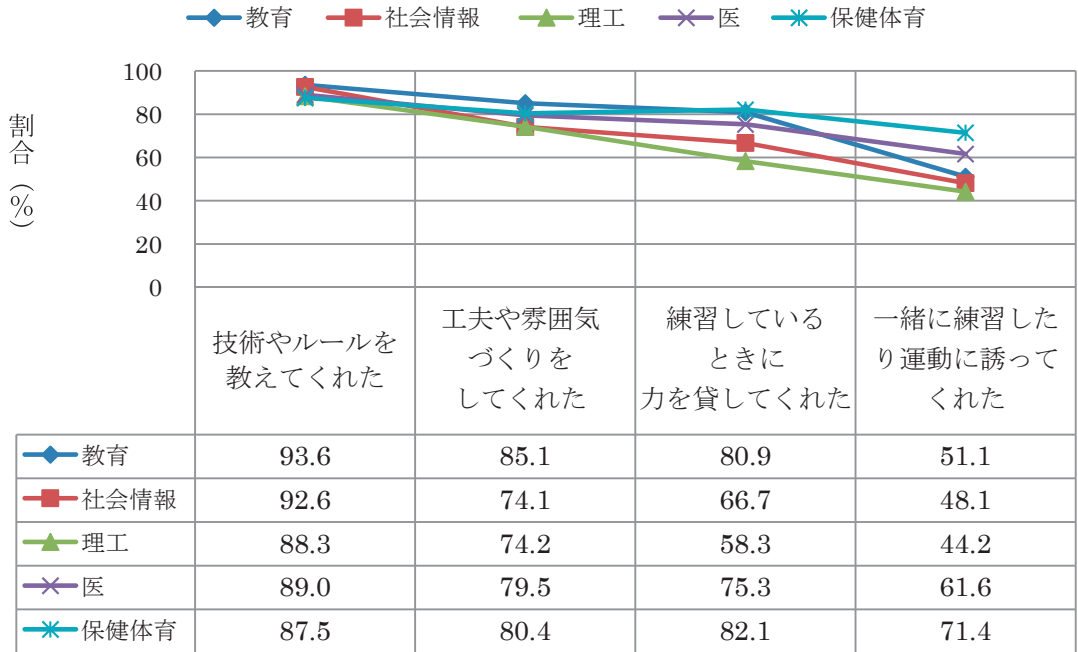


図4 体育の先生は授業中どのように指導してくれたか

その結果、以下のことが考察された。

- ・「1. 技術やルールを教えてくれた」においては、全ての学部で約9割と高い割合を示した。
- ・「4. 一緒に練習したり、運動に誘ってくれた」においては、教育学部、社会情報学部、理工学部で約5割という低い割合を示した。

2-5. 体育の時間数について

体育の時間数について、「増やしたほうがよい」「このままでよい」「減らしたほうがよい」「なくしたほうがよい」からあてはまるものを選び回答してもらった(表1)。

表1 体育の授業時間数について

項目	学 部					計
	教育	社会情報	理工	医	保健体育	
増やしたほうがよい	7 (14.9)	2 ( 7.4)	6 ( 5.0)	7 ( 9.6)	19 (33.9)	41 (12.7)
このままでよい	37 (78.7)	21 (77.8)	103 (85.8)	61 (83.6)	37 (66.1)	259 (80.2)
減らしたほうがよい	3 ( 6.4)	2 ( 7.4)	8 ( 6.7)	4 ( 5.5)	0	17 ( 5.3)
なくしたほうがよい	0	2 ( 7.4)	3 ( 2.5)	1 ( 1.4)	0	6 ( 1.9)

人数 (%)

その結果、以下のことが考察された。

- ・保健体育専攻では、「増やしたほうがよい」と思っている者が約3割である。



- ・保健体育専攻以外の4つの学部では、「このままでよい」と思っている者の割合が約8割である。
- ・保健体育専攻以外の4つの学部では、少数ではあるが、「減らしたほうがよい」「なくしたほうがよい」と思っている者もいる。

2—6. 体育授業に意欲的に取り組むために必要な条件は何であると思うか

体育授業に意欲的に取り組むために必要な条件（図5の11項目）について、特に必要だと思うもの3つを選び回答してもらった。

それぞれの項目の学部別の人数の割合を図5に示す。

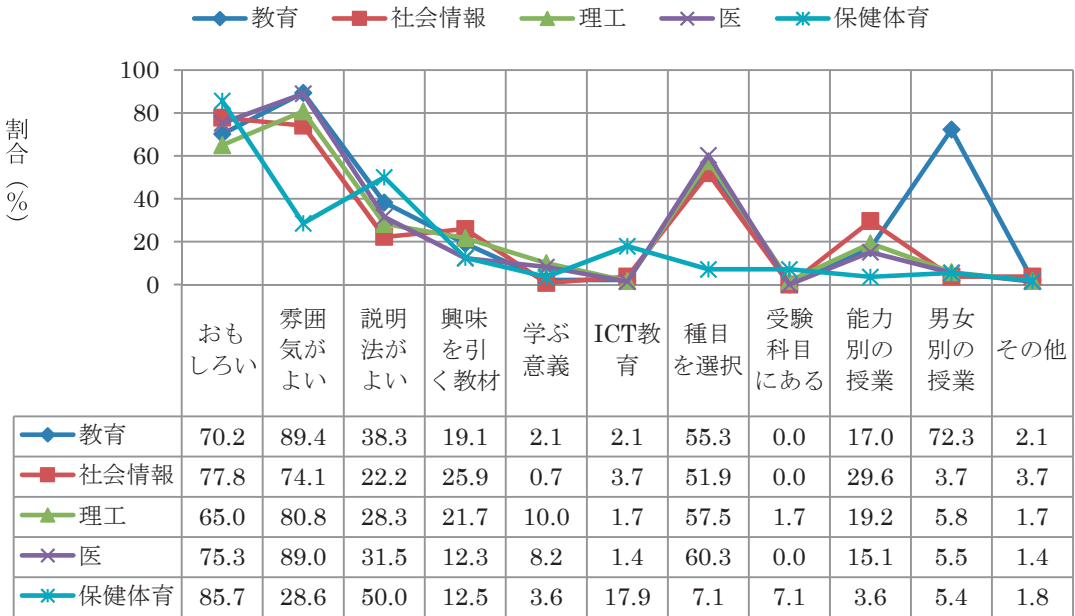


図5 体育授業に意欲的に取り組むための条件

その結果、以下のことが考察された。

- ・「1. 授業がおもしろい」「2. 授業の雰囲気がよい」を選択した者が多かった。
- ・保健体育専攻以外の4つの学部では、「7. やりたい種目を自分で選択して行うことができる」を選択した者も多かった。

2—7. 体育における「学力」とはどのような力であると思うか

体育における「学力」とはどのような力であるかについて、図6の6項目から一つを選んで回答してもらった。

それぞれの項目の学部別の人数の割合を図6に示す。

「その他」には、「先のことを考えて自主的に行動できる力」「授業前後の運動能力の差」「学力的なものではなく体力に関わるもの」「授業に出席していればよい」「仲間と協力できる力」「努力量や授業への姿勢」「体の動かし方」「精神力」「やったことないものに挑戦する力」「体育に対する意欲」といった意見が挙げられていた。

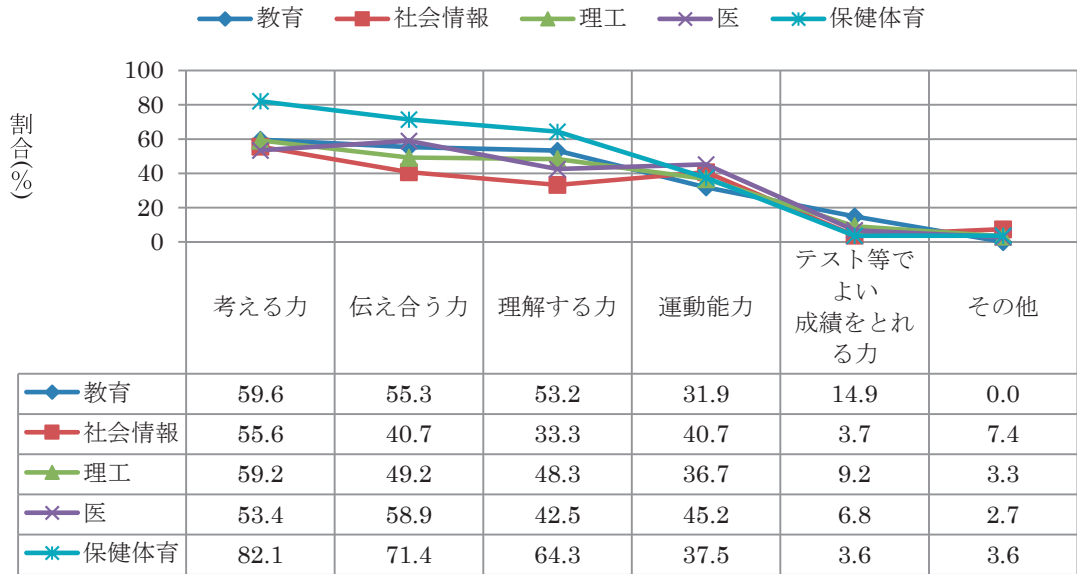


図6 体育における「学力」とはどのような力であるか

その結果、以下のことが考察された。

- ・「考える力」については、保健体育専攻で、8割を超え、他の4学部すべてにおいても5割を超える結果となった。
- ・「伝え合う力」については、保健体育専攻で7割を超え、教育学部、理工学部、医学部においては、ほぼ半数となった。
- ・「運動能力」については、3割～4割程度の結果となった。
- ・体育の学力は、「運動能力」や「テストの成績」ではない、と捉えられてはいるが、一方「考える力」「伝え合う力」「理解する力」であると捉えている者も、5割以下にとどまった。

## 2-8. 体育において必要な「学力」は何か

体育において必要な「学力」とは何かについて、2-8同様、図7の6項目から一つを選んで回答してもらった。

それぞれの項目の学部別人数の割合を図7に示す。

「その他」としては、「先のことを考えて自主的に行動できる力」「授業前後の運動能力の差」「学力的なものではなく体力に関わるもの」「授業に出席していればよい」「仲間と協力できる力」「努力量や授業への姿勢」「体の動かし方」「精神力」「やったことないものに挑戦する力」「体育に対する意欲」といった意見が挙げられていた。

その結果、以下のことが考察された。

- ・「考える力」について、保健体育専攻では9割を超え、教育学部では7割近くとなったが、社会情報学部、理工学部、医学部の3学部では、5割にとどまった。
- ・「伝え合う力」については、保健体育専攻及び教育学部では7割を超えたが、社会情報学部、理工学部、医学部においては、5割程度の結果となった。
- ・「理解する力」については、保健体育専攻では3分の2を超えたが、社会情報学部では3割に満たなかった。

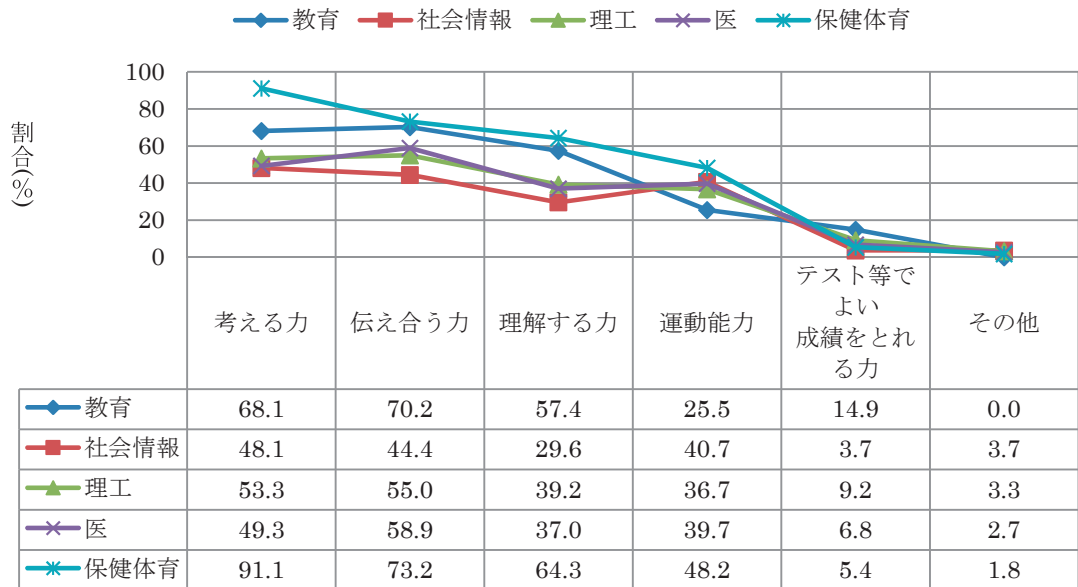


図7 体育において必要な「学力」は何か

- ・体育に必要な学力は、「運動能力」や「テストの成績」ではない、と捉えられてはいるが、一方「考える力」「伝え合う力」「理解する力」であると捉えている者も、保健体育専攻以外の学部では、多いといえない結果となった。

### 3. まとめ

質問紙調査の結果をまとめると以下の通りになる。

- ・体育は、「一番得意な教科」「好きだし楽しい教科」「がんばろうという意欲が出る教科」という3つの項目で、保健体育専攻が9割を超えた。また、全ての項目において社会情報学部は6割以下、理工学部は5割以下にとどまった。一方で、「大切な教科」と回答したものは、保健体育専攻でも8割に届かず、体育はあまり大切な教科ではない、との意識を持っていると推察された。
- ・体育の目的は、「健康なからだをつくり、体力をつけること」「運動技能を身に付けること」「いろいろなからだの動かし方をできるようにすること」「体を動かすことの喜びやおもしろさを身に付けること」という4つの項目で、どの学部も8割を超える結果となった。
- ・体育授業の進められ方・行われ方は、「十分に運動する時間をとってくれた」という項目で、どの学部も9割を超える結果であった。一方、「ていねいに教えてくれた」「やる気を起こさせてくれた」という項目では、7割程度にとどまり、加えて、学部間で差がみられた。
- ・体育の先生の指導は、「技術やルールを教えてくれた」という項目で、どの学部もほぼ9割を示した。一方、「困ったときや練習しているときに力を貸してくれた」「一緒に練習したり、運動に誘ってくれた」という項目では、学部間で差がみられた。
- ・「体育授業に意欲的に取り組むために必要な条件」においては、「授業がおもしろい」を選択した者の割合が7割を超えた。また、保健体育専攻以外の4つの学部では、「授業の雰囲気が良い」「やりたい種目を自分で選択して行うことができる」を選択した者の割合も高かった。

・「体育の学力」については、何を体育の学力と捉えるのか、そしてどのような体育の学力が必要なのかを理解しているものが多くない結果となった。前学習指導要領（文部科学省, 2008）より、体育的学力は「技能」「態度」「知識、思考・判断」と考えるようになっている。さらに新学習指導要領（文部科学省, 2017）においても、学習者の身につけるべき資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」としている。むろん、体育・保健体育においても、これら3つの資質・能力を身につけるための学習内容が系統的に明確に示されている。しかしながら、学習者にそれらが理解されていない現状にあると言わざるを得ない。

## IV 結 論

本研究は、大学生への質問紙調査を実施し、中学校における体育授業に対する認識の実態を把握することによって、意欲的に取り組むことができる体育授業の在り方について考察することを目的とした。

その結果、以下のように結論付けられた。

まず、子どもたちに体育の必要性や重要性を認識してもらうことが大切である。そのためには、学習者が体育の目標を理解できるような授業を行っていく必要がある。具体的には、各単元のねらいや毎時間のめあてを明確にし、それを子どもたちと共有することで、何のために行うのか、何をできるようにするのか、子どもたちが目標を持って授業に取り組めるようにすることである。

また、丁寧な指導や子どものやる気を起こさせる授業を行っていく必要がある。丁寧な指導の具体的なものとしては、ルールや課題の簡易化、技能面の具体的なフィードバックが挙げられる。また、やる気を起こさせる指導としては、肯定的なフィードバック、全員が“できた”という達成感を味わえるような内容が挙げられる。

最後に、学習者が求めるようなおもしろい授業や雰囲気がよい授業を展開していく必要がある。おもしろい授業にするためには、競争やゲーム性のある課題を設定したり、仲間とのかかわりを大切にし、チームで一体となることができる活動を取り入れていく必要がある。また、雰囲気がよい授業にするためには、仲間同士で励ましあったり教えあったりする雰囲気をつくったり、全員が約束やルールを守り秩序を保って活動できるよう指導したり、教師が肯定的な声掛けを行っていくことが必要である。

## VI 今後の課題

本調査では調査対象校1校および対象学年1年生のみであったため、今後はさらに調査対象を増やしていくことが必要である。また、今回使用した質問紙の文言に不明瞭な点があり、内容の捉え方に個人差があったことが推察されるため、さらにそれらの文言を推敲していく必要がある。また、今回得られた回答は、その詳細が不明確であったため、インタビュー調査などを実施することによって、より具体的な内容を把握することが必要である。

## 文献

- 1) 東龍之介・宮本隆信・大塚剛弘 (2010) 小・中学校における体力と学力の関係について. 高知大学学術研究報告, 第 59 巻 : 109-119.
- 2) 中央教育審議会 (2002) 子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申)
- 3) 中央教育審議会 (2005) 健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会これまでの審議の状況—すべての子どもたちが

身に付けているべきミニマムとは？ー

- 4) 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領保健体育編
- 5) 岡野 昇・山本俊彦 (2003) 現代の子どもと教師の体育に対する意識調査. 三重大学教育学部研究紀要 教育科学, 第 54 巻 : 33-43.
- 6) 大築立志 (2009) 教養としてのスポーツ・運動—身体知—. 体育の科学, 第 59 巻 (11) : 723-727.
- 7) 谷口勇一・田中賢治・西本一雄 (2009) 子ども期における「体力」と「学力」の関連性. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 32(1) : 129-137.
- 8) 新本惣一郎・三木由美子・山崎昌廣 (2016) 小学生の体力と学力の関連性. 日本生理人類学, Vol.21 No.2 : 75-82.
- 9) 植田深幸・魚住政男・澤本 章・林川基治・宮崎擴道 (2008) 学ぶ意欲を高めるための改善に関する研究. 研究論叢, 第 3 部芸術・体育・教育・心理 58 : 135-148.

